

## 特集にあたって

松村 正三

大学時代の旧友、大山達雄氏から OR 学会誌への寄稿を依頼されたのは昨年の夏でした。単なる原稿書きではなく「防災特集」を企画せよ、とのことで、とてものことに私の手には余る仕事であると初めは躊躇しました。それを結局のところお引き受けする次第となったのは次のようなわけです。

私どもの研究所は小さな所帯ながら雪から地震まで自然災害のひと通りを扱っています。ところが、同じ所内にいても分野が異なると仕事上のインタラクションをもつことはほとんどありません。けれども本当は防災研究に共通した問題や考え方があるのにもかかわらず自分が知らないだけかもしれない、これを機会に他分野の研究を覗いてみるのも認識をあらためるきっかけになるのではないかと、思い直したのです。話を具体化する段階では思い余ることもありました。結果的には所内の友人のつてを頼ることで、それぞれの分野の最前線で現在活躍中の各氏から原稿をお寄せいただくことができました。

さて、岸井徳雄氏の「昭和50年代の風水害と課題」は、昭和50年代に焦点をあて、その時代の風水害の特徴を抽出することによって、災害のタイプがそれ以前とは異なってきていることを明らかにしました。これは、防災対策の進展や社会の変貌に起因するものであるが、それらを分析することによって防災対策や研究の課題自身が時代とともに変貌するものであることを教示されました。

岡田成幸氏の「地震防災における意思決定」は、地震の発災時を境にして事前と事後の防災対策がそれぞれどのようなべきかについてを議論したものです。極めて複雑な防災計画において、種々の条件下での最適解が何であるかを求めるという社会工学的な視点からによる明快な指針を提示されています。まさに OR 学会誌に相応しい内容だと思われまふ。

諏訪浩氏の「土砂災害とその教訓」は、同じような

土砂災害にもさまざまな誘因のあることを具体的な事例を挙げて平易に説いています。過去の事例を科学的に分析し、災害を起こす素因と誘因について正確な知識と理解を持つことの大切さを強調されています。

和泉薫氏の「近頃雪崩災害を忘れていませんか」は、雪崩にまつわる言い伝え、モニュメント、地名などさまざまな“災害文化遺産”について軽妙な文章で紹介し、諏訪氏と同じく、まず過去の事例から学ぶことが防災研究および対策の基本であることを説き起こされました。

筆者の「地震予知は可能か?」ですが、気負ったタイトルの割には結論が尻切れとんぼになってしまいました。これを読んだ方は、あるいは、はぐらかされた気がするかもしれません。けれども、それが必ずしも筆者の責任というわけでもないのです。このような曖昧さこそが現在の地震予知研究の実情そのものだからです。

以上の5課題は、これで自然災害のすべての分野を網羅したわけではありませんが、主なところを代表することができたのではないかと思います。そしてこれだけの多彩な内容でありながら、これらの論文からその底には防災研究に共通する考え方の流れが在ることを感じさせられます。それは、防災の基本は何よりもまず自然災害に対しての正しい認識とかつ科学的な理解を持つことである、ということです。防災を研究することの本質もまたその部分にあると言えるでしょう。研究にたずさわる立場から言えば、防災研究には科学する面白さと実際の防災に資する使命感との二面性があります。今回の特集は、ややもすれば前者に偏りがちな私たちの意識のバランスを取り戻す機会ともなりました。

最後に、この特集を組むにあたってご助力いただいた防災科学技術研究所の森脇寛氏、納口恭明氏、木下繁夫氏に感謝の意を表します。